

## 2019 年度小城市農業再生協議会水田フル活用ビジョン

### 1 地域の作物作付の現状、地域が抱える課題

本市においては、集落営農組織及び大規模農業者による土地利用型農業が大部分を占めており、年々、担い手への農地の集約化が進んでいる。また、平坦部の大部分で表作は米または大豆、裏作は麦が作付けされ、県内でも有数の穀倉地帯となっており、水田のフル活用に取り組んでいる。さらに近年では、タマネギ等の露地野菜に加え、アスパラをはじめ、施設野菜等の栽培面積も増加傾向にあり、米・麦・大豆の土地利用型農業に野菜を取り入れた複合経営の進展が見られる。

その一方で、平坦部については、WCS用稲等の新規需要米の作付拡大により、大豆のブロックローテーションの維持等が懸念されている。また、生産条件の悪い中山間地域については、荒廃化・山林化が徐々に進んでおり、担い手の高齢化や不足といった地域営農を継続していく上で切実な問題も表面化している。

このことから、今後、土地利用型農業を中心に経営規模の拡大を志向する農業者等と施設園芸による経営資源の集約化を図る農業者等との間で、農地の円滑な貸借の促進を図り、労働資源の適切な配分と役割の分担化がなされるよう、「人・農地プラン」等を積極的に活用しながら、地域が一体となった農業発展を目指す。それに加えて、引き続き大規模経営体や生産組織に対する農地・農作業の集積を図るとともに、「農地中間管理機構」を活用した農地の集約化に取り組むなど、生産体制の効率化と低コスト化に向けた動きを加速化していく。

さらに、農業所得の低迷からくる生産意欲の低下を防ぐために、農畜産物の付加価値を高めながら、特色ある特産品開発を支援し、6次産業化を促進するとともに、農業が職業として選択しうる魅力とやりがいのあるものとなるよう支援を行っていく。

### 2 作物ごとの取組方針等

#### (1) 主食用米

主食用米については、昨年度、「生産のめやす」に即した作付けの推進を図った。30年産の作付実績は、「さがびより」が1004.6ha、「ヒノヒカリ」が205.5ha、「夢しずく」が175.2ha、「ヒヨクモチ」が423.0haとなっている。なお、平成31年産も「生産のめやす」に即した作付けの推進を図っていく。

今後は、近年評価が高まっている「さがびより」を中心に、品種ごとの需要に即した作付けがなされるよう農業関係機関と連携しながら推進を図るとともに、安定的な生産・供給体制を維持する。

#### (2) 非主食用米

##### ア 飼料用米

水田のフル活用を目指して、主に中山間地域の主要転作作物として取組拡大を目指し、大豆の生産条件が悪い平坦部の一部地域においても団地化し、大豆のブロッ

クローテーションを妨げないような取組を図り、荒廃化及び山林化の抑制、並びに不作付地の解消に向けて、今後、産地交付金を活用しながら、多収品種の導入や実需者とのマッチングを支援し、需要に応じた生産を推進する。

あわせて、現在、多収品種の中でも市内の大部分で作付けしている推奨品種を産地交付金により取組拡大に向けて推進していく。

#### イ 米粉用米

水田のフル活用を目指して、生産条件の悪い中山間地域を中心に、荒廃化及び山林化の抑制、並びに不作付地の解消に向けて、今後、複数年契約の取組や実需者とのマッチングを支援し、需要に応じた生産を推進する。

#### ウ WCS用稲

WCS用稲については、地域の実需者との契約に基づき、需要に応じた生産を維持するとともに、近隣圃場へ影響が出ないよう作付圃場の団地化を推進し、肥培管理及び防除等の栽培管理の徹底、並びに大豆のブロックローテーションを妨げないような取組を図る。

また、産地交付金を活用して、耕畜連携の取組を支援していく。

#### (3) 麦、大豆、飼料作物

麦については、市内全水田面積の8割超で作付けがなされているが、引き続き収量及び品質の向上を目指すとともに、産地交付金を活用して、二毛作よる水田のフル活用を推進する。また、土づくりの推進、環境にやさしい農業を確立するため、産地交付金を活用して、収穫後の麦わらをすき込み等の有効活用の取組を支援していく。

大豆については、今後とも重要な戦略作物として、産地交付金を活用しながら、主に平坦部の主要転作作物としてブロックローテーションによる更なる収量及び品質の向上を目指す。

あわせて、地域全体の大豆の生産性を保つため、産地交付金により大豆作付を担い手に集約する取組拡大に向けて推進していく。

飼料作物については、畜産農家の需要に応じた生産を推進する。

#### (4) そば、なたね

実需者の要望に応じて作付けを推進する。

#### (5) 高収益作物（園芸作物等）

産地交付金を活用して作付拡大と産地化を推進する。

施設野菜等については、近年拡大傾向にあるアスパラガスのほか、イチゴ、キュウリ、ナス、トマト、小ネギを中心に作付振興を図っていく。

露地野菜については、ブロッコリー、レンコン、タマネギ、キャベツの作付面積が年々増加しており、これらの作物を中心として引き続き作付けの振興を図っていく。

### 3 作物ごとの作付予定面積

作物	前年度の作付面積 (ha)	当年度の作付予定面積 (ha)	2020年度の作付目標面積 (ha)
主食用米	1,843.0	1,864.7	1800.0
飼料用米	66.5	91.5	95.6
米粉用米	0.0	2.5	2.5
WCS用稲	154.0	162.4	165.5
加工用米	0.6	0.5	0.6
麦	2,576.8	2,576.8	2577.0
大豆	818.6	818.6	840.0
飼料作物	23.0	26.2	27.2
そば	0.3	0.4	0.5
その他地域振興作物	98.9	100.6	107.1
野菜	96.6	96.6	103.1
花き	2.3	4.0	4.0

#### 4 課題解決に向けた取組及び目標

整理 番号	対象作物	用途名	目標	目標値	
				前年度（実績）	目標値
1, 2	麦 飼料作物	二毛作助成 （二毛作）	麦の二毛作の面積	(2018年度) 2559.6ha	(2020年度) 2559.6ha
			飼料作物の二毛作の面積	(2018年度) 12.1ha	(2020年度) 14.5ha
			水田利用率	(2018年度) 181.5%	(2020年度) 182.4%
3	WCS用稲	資源循環（基幹）	資源循環に取り組む面積	(2018年度) 100.3ha	(2020年度) (100.0ha) 106.2ha
4	大豆	担い手の生産支援 （基幹）	担い手の大豆作付面積	(2018年度) 804.1ha	(2020年度) 830.0ha
5	飼料用米	推奨品種の取組 （基幹）	推奨品種の作付面積	(2018年度) 66.5ha	(2020年度) 70.0ha
6	野菜・花き	園芸作物等の生産支援 （基幹）	園芸作物等の作付面積	(2018年度) 98.7ha	(2020年度) (95.8ha) 100.7ha
7	ブロッコリー、キャベツ	地域重点振興作物の 生産支援（基幹）	地域重点振興作物の 作付面積	(2018年度) 8.5ha	(2020年度) (9.0ha) 10.5ha
8	麦	麦わら有効活用 （基幹作・二毛作）	麦わら有効活用した 麦作付け面積	(2018年度) 2094.6ha	(2020年度) (1780.0ha) 2194.6ha
9	飼料用米	多種品種の取組 （基幹）	多収品種の作付面積	(2018年度) 66.5ha	(2020年度) 70.2ha

※ 必要に応じて、面積に加え、取組によって得られるコスト低減効果等についても目標設定してください。

※ 目標期間は3年以内としてください。